

特別寄稿

中国・台湾訪問記 再来一杯茶 《1》 (お茶をもう一杯下さい)

※台湾の豆腐と乾物スープ

仕事と観光で中国・台湾・香港には、80回訪問した。内、妻とも10回訪問している。異国に行く楽しみなのは食べ物。台湾で食べた臭豆腐(しゅうとうふ)と佛跳牆(ぶつちょうしょう)は、特に印象が強かった。



台湾名物の通勤ラッシュのオートバイ

○臭豆腐

会社に在職中、労働組合の役員が台北へ訪問した記事を組合新聞に掲載したのを読んでピーンときた。記事の趣旨は「台北の町並みは思った以上に近代的だったが、下水の臭いがするのには参った。」

実は私も当初台湾で同じ経験をした。最初は私も下水の臭いだと思ったが、数回訪台したらある関係に気が付いた。下水の臭いがする所に屋台がある。屋台に近づくと、強烈な下水の臭いだ。それは豆腐に臭い菌で臭いをつけた臭豆腐という食べ物の臭いだった。

その臭いは、真夏の腐った下水を掻き混ぜているような強烈な臭いで、大島名物のクサヤの100倍以上強く(?)、恐らく初めての日本人は10m以内に近づけないだろう。秋田名物のしょつつも臭いが強いが、臭豆腐に比べたら香水みたいなものだ。

台湾人から勧められて初めて口にした時は、現地人には申し訳ないが吐き出してしまった。しかし2度目の時は、清水の舞台から飛び降りる

気持ちで呑み込んだ。と・・・、その時に、喉越しが何とも言えない不思議な快感だった。これ以来、臭豆腐を食べられるようになった。

この臭豆腐は、最近のレストランでは扱っていない。外国人から、臭いが嫌われて来店しなくなるからとのこと。今は臭豆腐を食べるには、屋台しかない。台湾は毎日夜市があり、実に屋台が多い。台湾に行った際には、是非挑戦してみたらどうだろうか。



台北の市場：臭いが強く妻はマスクを掛けて見学

○佛跳牆

台北で仕事が終わって、夕食に招待された日のこと。いつものようにビールと紹興酒で、乾杯乾杯(ガン・ベイ ガン・ベイ)と言って飲み続けた。宴会が終わりに近づいた頃、ウエータがうやうやしく壺を持ってきて木槌で蓋を割った。それはスープが入っていた壺で、ウエータが湯のみ茶碗のような小さな碗に分けてくれた。

一口飲んだら、今まで飲んだことがない何とも言い様がない高貴な味である。すぐに以前新聞で読んだことがある、佛跳牆だと確信した。修行中のお坊さんが、あまりの良い匂いに堪らず牆(しょう/意: 塀)を飛び越えて来る! から名づけられたスープである。

このスープには干しエビや干し貝などの干物で、何日もゆっくり煮て作る。したがって前もって予約をしておかないと飲むことができない高価な料理だ。このスープを飲んだら酔いがスーと消えるようで、誠に心地が良い飲み物であった。もちろん「再来一杯湯(スープをもう一杯下さい)」と言ってお代りをした。

しかし残念なのは、これが最初で最後の経験だった。酔っていたのでこのレストランで飲んだのか、値段は幾らなのか見当がつかない。

★出典 Wikipedia : 佛跳牆は干物を主体とする様々な高級食材を数日かけて調理する福建料理の伝統的な高級スープ。中国では、高級なものは50万円ほどする。歴代の中国皇帝が食べていた佛跳牆は、食材にこだわりすぎたため、現在の価値で5000万~1億8000万円ほどする。

※打包(ダーバオ/意: 持ち帰ります)

入社した当初の職場の上司が、シンガポールの技術部門のダイレクターに転動していた時、彼の管轄の職場がシンガポール・ペナン(マレーシア)・香港・台湾に在り、台湾で度々お会いした事がある。ある日台北で、「食べ物を持ち帰りたい時に中国語で何と言えば良いか?」を質問された。そこで「打包(ダーバオ)」を教えた。打包は

食べ物を持ち帰るので、バックして下さいという意味である。

次に台湾で会った時に、「ダーバオと言ったら、お店の小姐(ジャオジエ/意: 娘さん)に笑われて恥を掻いた!」と言われた。中国語のアクセントは日本語や英語の強弱と異なり、音楽のドレミファソで発音する。「打包」は、「レー(低)・ソー(高)」と発音する。笑われた時の彼の発音は、間違いなく中国人の小姐に「レー・ソレ」に聞こえたのだろう。これは「打炮」と書き意味は大砲を打ち込むであるが、この言葉にはスラングがあり「セックスしよう」となる。この話をレストランで聞き、再来一瓶啤酒(ビールをもう1本下さい)と言いながら2人で大笑いした。

同じようなネタがある。「水餃一碗多少錢?」で、意味は「水餃子一碗幾らですか?」である。最初の「水餃(スイエイ・ジャオ/音: レソ・レー)」を同じ発音で「ソレ・ソレ」と言うと、後の意味も異なって「睡覺一晚多少錢?」と聞こえ、意味は「一晩寝ると幾ら?」となる。中国語ができるのにワザと「水餃」を「睡覺」と発音して、小姐に冗談を言う輩がいる。

このように中国語は発音の難しい言語だと思う。私は会社(日立)を早期退職した後、直ぐに北京大学の哲学系(科)に留学した。日本で5年間中国語を勉強してからの渡航であったが最初の1週間、北京人の発音がまったく聞き取れなかった。良く中国語を北京語と言うが、実際には中国普通語(標準語)と北京語



北京大学の学生証

では発音が大きく異なる。市中に出て帰る時にタクシーの運転手に「北京大学」と言うと、いつも「ペダール?」と聞き返され、はて何を言っているのかわかりできなかった。しかし目的地は間違えずに北京大学に到着するのである。それを3~4回経験して、タクシーを降りたその瞬間に「ペダール?」の意味が頭にひらめいた。運転手は「北大児?」と言ったのだ。普通語の北大の発音は「ペー・ダー」であるが、運転手は北大の後に「児」を付け、更に「児」の発音は軽く口を開けて舌を浮かせて発音していたのでまったく聞き取れなかったのである。「児」は、北京人の癖で付く助詞で意味はない。

この「児」は、秋田弁で言えば馬を「うまこ(馬子)」と言うが、この子と同じだ。これに気が付いたのが滞在1週間後で、この事で普通語と北京語の変換ルールが理解でき、それから北京語が聞き取れるようになった。

※北京大学の西門

東大は赤門で知られているが、北京大学の西門は有名のように毎朝多くの中国人観光客が西門で記念撮影をして混んでいた。その門は、日本の寺や神社の門のような彫刻が施され彩色もされていた。私の通った

特別寄稿/中国・台湾訪問記 再来一杯茶 《1》

哲学系の校舎はまるで日本の神社のような風格があり、入口の天井が低くて頭を下げないと入れない仕掛けで礼をして入る感じだ。哲学系の校舎の前には幅200m位の広大な中庭があり、それを挟んで向かいには日本語系の校舎があった。



北京のレストランで (後方左: 毛沢東・右: 周恩来)

※北京の包子(パオズ)

授業が終わった後、運動のため大学近くの宿舎から3kmほど離れている、西太后が造ったといわれる頤和園に度々歩いて行った。ある日頤和園からの帰りが夕方になり、腹が空いたので道筋にあった包子(餃子)の店に入った。これが美味しく「再来一個包子(餃子をもう1個下さい)」や「再来一瓶啤酒(ビールをもう1本下さい)」などと言い、北京の味を十分に堪能した。日本では2~3千円位の食事だと思い、



青島で

費用を聞いたら130元(1800円)との事で、まああの料金だと思い支払おうとしたら、130元が聞き間違いで13元(180円)だった。

「え~安過ぎ、嘘みたい!」と思いながら支払った。

北京オリンピックの前の事で、今は物価が上がっているのもっと高くなっているだろう。

◆記事

嵯峨 良平 (昭和43年電気科卒)
東京秋工会 副幹事長

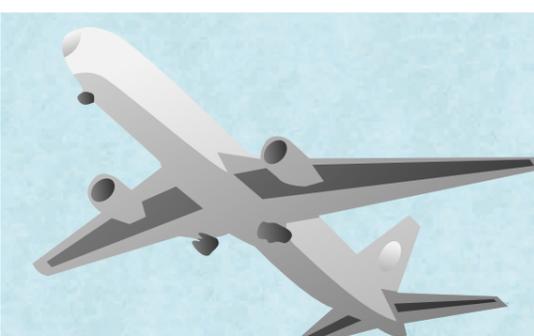


◆ 総合フードサービス事業 ◆

テンシャル株式会社

代表取締役 大塚 廉造 (K・32卒)
相談役 大塚 洋夫 (E・35卒)

東京都中央区新川2丁目7番7号クレール八重洲ビル204
TEL.(03)3297-1066 FAX.(03)3297-1063



S A I T O

www.saito-group.com/

株式会社 斉藤建設

〒248-0011 鎌倉市扇谷4丁目5番8号
TEL.0467-25-0567(代)
FAX.0467-23-3972

取締役 北 埜 博 (昭和44年建築科卒)